

青木志満六

青木志満六は、東京の美術学校やデパートで西洋画や商業的なデザインを学び、会津に移住した後、その経験を活かして、大正時代末から昭和初期にかけて、絵画、出版、漆器業など幅広い分野で活躍しました。

西洋画と図案を学ぶ

青木志満六（本名・島六）は1888年（明治21）、群馬県桐生市に生まれました。幼い頃から絵が好きで、展覧会に入賞したのをきっかけに、本格的に画家を目指したと言われています。若い頃の経歴は不明な点が多いのですが、一時期、東京美術学校（現在の東京芸術大学）の予備科に所属し、その後、東京の三越（白木屋呉服店という説も）の図案部で友禅のデザインを描く仕事に就いたようです。

この時代の三越は、呉服店から総合的なデパートメントストアへの進化を図っており、その中で図案部は商品のデザインだけではなく、広告、出版、陳列と多岐に渡る仕事を手掛けていました。ここでの経験は、後に志満六が、会津で多様な仕事をこなす上で大いに役に立ちました。また、この頃に、日本画を勉強するために上京していた会津出身の関根モトと出会い、1919年（大正8）に結婚しています。



明治末頃の三越呉服店（東京都日本橋区）

会津への移住

志満六は元々あまり体が丈夫ではなく、持病のリウマチが悪化したため、1923年（大正12）に起こった関東大震災の前後に、仕事をやめて妻の故郷である会津に移住しました。

会津では、志満六は地元の洋画家たちが結成した紅樹社に加わって、何度か展覧会に作品を出品しています。紅樹社は若松市の歴代市長の肖像を描いており、志満六が描いた初代市長秋山清八の肖像画は、今も会津若松市役所の議場に飾られています。その後も志満六は、黙歩会や彩光会などの美術クラブに所属し、しばらくは洋画家として活動していましたが、時代が昭和に入ると図案家としての仕事を中心になっていきます。

図案家としての多彩な活動

志満六は、印刷所の下請けを引き受けていた他、物産陳列館の装飾係、漆器協同組合の事務員などの仕事に就いて、いろいろな図案を手掛けました。1927年（昭和2）に若松市の市徽章として制定され、現在も会津若松市の市章となっているデザインの制作にも関わっています。それ以外にも、観光パンフレット用の鳥瞰図、『会津若松市勢要覧』や『若松市物産陳列館概覧』の装丁、観光絵葉書の封筒、酒のラベルやパンの包装紙のデザインなどもしていました。



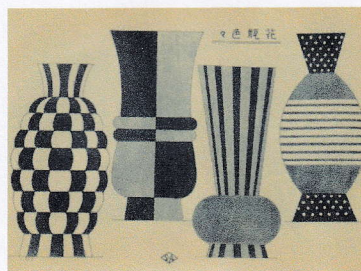
会津若松市章

また、会津漆器が海外への輸出用のデザインを模索していた時期に、漆器の斬新な図案をたくさん考案しています。志満六のデザインは漆器向きでなかったことなどもあり、ほとんど製品化されなかったのですが、彼が多数の漆器図案集や会津漆器についての冊子を編集していたことから、会津漆器の振興に精力的に取り組んでいたことが伺えます。

青木志満六は、東京のデパートという当時最先端の現場で学んだモダンデザインを会津に持ち込みました。彼の幅広い仕事は、会津の産業・観光が近代的なデザインを取り入れる上で、大きく貢献したと言えるでしょう。



『会津若松 産業と名所案内』



青木志満六が描いた漆器のデザイン（『漆器図案集』より）



青木志満六

生：1888年（明治21）11月7日

没：1956年（昭和31）1月14日 69歳

写真提供：「三越呉服店」 国会図書館デジタルコレクションより転載

『会津若松 産業と名所案内』 個人蔵、『漆器図案集』 会津若松市立会津図書館所蔵

敬称略